

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26285174

研究課題名(和文) 戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析 冷戦と植民地主義に着目して

研究課題名(英文) Comparative and Historical Analysis of Education in Postwar East Asia:
Focusing on the Cold War and Colonialism

研究代表者

駒込 武 (Komagome, Takeshi)

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80221977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題は、冷戦と植民地主義に着目して、戦後東アジア諸地域における教育のあり方を比較的に分析することであった。本研究の一つの柱は、1950年代に台湾、中国、朝鮮の子どもたちが書いた作文を集めて出版した『世界の子ども 中国朝鮮篇』(1955年)の分析である。分析の結果として、作文集の編集過程も内容も冷戦体制の影響を色濃く受けており、脱植民地化への志向が作文に表現されるのは稀だったことを指摘した。もう一つの柱は、日本教職員組合奄美地区支部の資料の分析である。戦後米軍統治下におかれた奄美の復帰運動には、沖縄における復帰運動と同様、戦前以来の植民地主義を問い直す傾向は弱かったことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の教育史研究では、戦後日本の歴史は、戦後東アジアの歴史から切り離されてきた。たとえ東アジアが視野に入れられる場合でも、日本・朝鮮・中国という軸を中心とした考察が一般的であり、日本・奄美・沖縄・台湾という軸での考察はほとんど行われてこなかった。結果として、戦後日本における歴史意識と歴史教育は、戦前戦後の脱植民地化という課題をきわめて不十分な形でしか問題化できなかった。本研究は、冷戦体制に深く規定された歴史意識と歴史教育を一国主義的な枠組みから解き放ち、東アジアの隣接諸地域との相互理解を進めるという社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study paid its attention to the Cold War and colonialism and analyzed the education in East Asia after the IIWW, using the method of comparative history. One focus of this study is an analysis of The Children of the World, China-Korea edition (1955), that gathered, translated, edited and published the compositions written by the children in Taiwan, China, Korean in the 1950s. As a result of the analysis, both the editorial process of the book and their contents were under the severe influence of the Cold War, and the movements for de-colonization were rarely expressed in their compositions. Another focus of the analysis are the documents concerning the Amami branch of the Japan Teachers' Union. Since Amami Islands were placed under the direct rule of US government after the war, the tendency to question Colonialism since prewar days was weak, as was in Okinawa after the war.

研究分野：教育史

キーワード：冷戦 植民地 教育 平和 台湾 朝鮮 中国 奄美

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、教育における「戦後的価値」の見直しが進められており、そのなかで私たちは何を本当に受け継ぐべきであり、何を改革すべきなのかをめぐって難しい判断を迫られている。このような時期であるからこそ、日本史という一国的な歴史把握を越えて、日本・台湾・朝鮮・中国を包括する東アジア世界において「戦後」とはどのような時代であり、「戦後」に先立つ時代に構築された教育体制とどのような格闘のなかから「戦後的価値」が生み出されてきたのか、あるいは、生みだしえなかったのかを検討する必要があると考えた。

(2) 戦後日本におけるこれまでの歴史叙述は、教育史に限らず、冷戦体制によりその認識枠組みを強く規定されてきた。米国を中心とした西側ブロックと、ソヴィエト連邦を中心とした東側ブロックのどちらを支持するのかが、狭義の政治的対立だったばかりではなく、学術・思想・教育の内部的な闘争としても展開された。そのことの歴史的なリアリティを十分にふまえながら、冷戦を軸とした問題把握と、植民地主義を軸とした問題把握を統合することが必要と考えた。例えば、戦前に台湾と朝鮮は同じように日本の植民地支配下に置かれたにもかかわらず、朝鮮史に比して台湾史への関心は等閑に付されがちであった。1960年代から70年代にかけて、「日・中・朝三国人民の連帯」を模索する政治運動や、これと密接に関連した歴史研究が展開されたが、この場合の「中」とは、もとより、社会主義を実現した中華人民共和国のことであった。「蒋介石独裁政権」のもとにあった台湾については、そこに暮らす住民が蒋介石政府をどのように認識しているかということすら省みられなかった。そのことは、冷戦に規定された認識枠組みの強さを物語る。他方で、台湾において戦前の日本支配と戦後の国民党支配では実質的に連続するところがあるにもかかわらず、これを植民地主義の継続として捉える視点は弱かった。冷戦的な知の枠組みが支配的だった戦後世界において脱植民地化をめぐる志向がどのような形で存在しえたのかを教育をめぐる事実即して検討したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、冷戦と植民地主義という二つの問題を軸として、戦後東アジア諸地域における教育の比較的分析を展開し、一国的な歴史認識の枠組みを越えた教育史像を構築することを目的とする。そのことを通じて、教育における「戦後的価値」とは何かを考える糸口とするとともに、東アジア諸地域の相互理解、それぞれの地域においてマイノリティ的な立場に置かれている人びとのエンパワーメントに資することを目的としている。対象地域は主に日本、台湾、中国、朝鮮である。しかし、すでに記したように、単純に国家間の関係史として捉えるのではなく、それぞれの地域に成立した国家内部でのマイノリティ的な集団（奄美諸島や沖縄諸島の人々等）をめぐる植民地主義的な関係に着目する。

3. 研究の方法

本研究の開始当初には東アジアにおける「戦後教育」というテーマにかかわって多岐にわたる研究対象と、それぞれにふさわしいアプローチの方法を考えていた。しかし、研究を進める過程で以下のように2種類の研究対象と研究手法に次第に収斂していくことになった。

第一は、平凡社が1955年から1957年にかけて刊行した『世界の子ども』（全15巻）を分析する手法である。『世界の子ども』は世界中の子ども作文を収集し、翻訳し、編集し、出版したものである。編集過程にかかわる歴史的事実と編集された作文にかかわる内容分析を通じて、編集過程と内容にどのように冷戦と植民地主義というテーマが表れているかを分析した。

第二は、日本教職員組合奄美地区支部の資料を分析する手法である。第二次世界大戦における日本の敗北後、沖縄と同様にアメリカの直接統治下に置かれた奄美諸島において教職員を中心として日本復帰運動が展開されるが、その際に奄美諸島を周縁化してきた植民地主義的な力関係がどのようにどのように省みられたのか、その際の試行錯誤は沖縄における復帰運動とどのように異なるのかを分析した。

4. 研究成果

(1) 平凡社の刊行した『世界の子ども』全15巻の内、とりわけ『中国・朝鮮篇』についての分析を進める作業を通じて、教育における冷戦と植民地主義というテーマにかかわって次のようなことを解明した。

1950年代当時、社会主義革命を通じて帝国主義を解体することこそが「平和」と「民族解放」への道であるとみなす反帝反戦論が、日本の革新陣営では強い影響力を持っていた。『世界の子ども』も決してその例外ではなく、冷戦的な知の枠組みを強化してしまうところもあった。他方で、反帝反戦論には還元できない「平和」への模索や、脱植民地化をめぐる試行錯誤の軌跡も見出すことができる。

『世界の子ども』は、全体として「農村の子ども」「鉱山の子ども」というように、産業に着目しながら子どもの作文を配列した上で、最後に戦争経験にかかわる作文を掲載している。『フランス篇』では、最後に「戦争と子ども」として第2次世界大戦経験を紹介している。『中国・朝鮮篇』の「中国篇」では抗日戦争で亡くなったお父さんへの手紙、「朝鮮篇」では北と南それぞれの立場で朝鮮戦争について記した作文、「台湾篇」では国共内戦のために「故郷」を離れざるをえなかった子どもの作文などを掲載した。

重要なのは、それぞれの戦争の歴史的な文脈についての説明をあえて付さなかったことである。解説の不在は、いわば意図された余白であった。何が「民族解放戦争」であり、何が「侵略戦争」であるかを定義しようとはしていない。世界中の子どもたちの戦争経験をつき合わせるには、この意図された余白が不可欠だったともいえる。異なる立場の戦争経験をモンタージュ的に編み直す手法は、それぞれの被害経験を出発点としながら脱中心化した観点への飛躍を促すものであり、冷戦的な知の枠組みを問い直す性格を備えていた。

植民地主義をめぐる問題については、編集過程において試行錯誤の跡が垣間見られる。『中国・朝鮮篇』において作文集めの指針とされた初期プロットは、台湾・朝鮮における植民地経験に着目していた。とりわけ「台湾篇」初期プロットでは「かつて日本が自分達の利益の為に作った植民地のしくみはそのままあらためられず、島民は相かわらず、苦しい生活をつづけなくてはならない」と記している。こうした記述から、帝国日本による台湾植民地支配の経験をふまえながら、同時代において「植民地の仕組み」が継続しているという認識がうかがえる。これは、当時の日本社会において稀な着眼であった。

しかし、こうした着眼は、現実の脱植民地化が後退していく過程の中で、ついに結実をみなかった。植民地経験にかかわる作文が、ほとんど寄せられなかったためである。台湾の場合、国民党政府が「正統な中国政府」を標榜する立場から中国史を「国史」と定めたために、帝国日本の植民地支配という台湾人固有の歴史的経験を書き記すのは、奨励されないどころか、むしろ禁忌とされていた。朝鮮半島では「解放」直後こそ植民地経験を問い返す動きが存在したものの、南北分断と朝鮮戦争をめぐる圧倒的な現実を前にして、そうした動きは中断を余儀なくされていた。

加えて、「台湾問題」が中共政府の対外政策において核心的なイシューであることを平凡社編集部側でもよく自覚していたからこそ「台湾は中国の一部」という立場を明確に示して、中共政府の忌諱にふれるような記述を避けようとしたと解釈できる。わずかに台湾の民俗行事を描写した作文や、台湾の子どもの描いた絵が台湾民衆の生活に思いをはせる手がかりとなっている。

在日朝鮮人もまた、東西冷戦の狭間にあって脱植民地化をめぐる困難に直面していた。朝鮮語の正書法は朝鮮民主主義人民共和国で制度的整備が進められていたものの、大韓民国で定める正書法と異なるなど南北分断が言語にも波及していた上に、「祖国」での生活現実に基づいた言語表現は、否応なく日本語の影響を強く受けざるを得ない在日朝鮮人の生活現実ともかみ合わないところがあった。同様の困難は、台湾人の前にも、モンゴル人の前にも横たわっており、自らの生活経験を「中国語（北京語・漢語）」で書くにはひそかな翻訳作業が必要とされていた。書くことをめぐる脱植民地化という課題の困難は国分一太郎のような人物にはかすかに感知されていたものの、『世界の子ども』というプロジェクトの容易には到達しえない臨界を形作っていた。

『世界の子ども』の分析を通じて、個が個として国境を越えて民際的に交信しながら、世界平和への責任を担う主体として「民族」を編み直す試みは消して容易なことではないことが明らかになった。だが、編集や通信の過程まで立ち入ってみるならば、その試行錯誤の中に冷戦的な知の枠組みを問い直す可能性があったことの意義は決して小さくないと結論づけることができる。

以上の研究成果の一部は、駒込武編著『生活綴方で編む戦後史 <冷戦> と <越境> の 1950 年代』として岩波書店より近日刊行予定である。

(2) 奄美復帰運動にかかわる教員組合の役割については 1946 年に北緯 30 度線を境界として奄美と沖縄を含む南西諸島は日本本土から切り離されて米軍統治下に置かれ、1953 年の奄美「復帰」後は、北緯 27 度線が米国の施政下に置かれ続けた沖縄を隔てた境界線となった。敗戦後すぐに米軍施政下におかれた奄美では公職追放のような措置がとられず、神社における「断食」や「日の丸掲揚」など戦前回帰的な方式で復帰運動が展開された。復帰したら生活が楽になるだろうという願いを受けて教員が旗を振っていち早い復帰が実現したが、復帰後も実際には米国によるガリオア資金の返済などのために経済的困窮はいっそう厳しいものとなり、「むしろ米軍統治の方がよかった」という声も聞かれるようになった。

奄美史・沖縄史にかかわる研究成果をフォローし、日教組奄美地区支部にかかわる資料を調査する作業を通じてこうした事態の深層に横たわる民衆意識、復帰運動の牽引者としての教員の役割、戦後東アジアの冷戦体制において奄美と沖縄の占める戦略的重要性という、少なくとも三次元の動きの相互関係に着目する必要があることが明らかとなった。ただし、奄美教育会館の所蔵する日教組奄美地区関係資料およびやはり同館の所蔵する松田清文庫（奄美社会運動史関係資料）の整理にエネルギーを注がざるをえず、研究成果としてはまだ公開できていない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 駒込 武	4. 巻 3
2. 論文標題 林獻堂日記にみる脱植民地化の隘路	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 同志社コリア研究叢書 日記からみた東アジアの冷戦	6. 最初と最後の頁 11-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 駒込 武	4. 巻 19
2. 論文標題 「帝国のはざま」を思考すること 書評への応答	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 クアドランテ	6. 最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 駒込武	4. 巻 48-1
2. 論文標題 イギリス史との対話の中で考える台湾植民地支配	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会科学	6. 最初と最後の頁 47-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2018.0000000114	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 駒込武	4. 巻 71
2. 論文標題 植民地史研究とキリスト教史研究のあいだ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 キリスト教史学	6. 最初と最後の頁 104-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 駒込武
2. 発表標題 台湾植民地支配と「国家神道」
3. 学会等名 台湾・台湾大学日本語文創新国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 駒込武
2. 発表標題 文明與殖民的辨証
3. 学会等名 台湾・ 植民地帝國日本の文化統合 出版20年回顧（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 駒込武
2. 発表標題 林茂生の「公教育」構想：「殖民近代教育」再考
3. 学会等名 台湾・国立成功大学「台湾史国際学術研討会 島嶼之光：台湾百年學校與社會變遷」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 駒込武
2. 発表標題 『世界史のなかの台湾植民地支配』
3. 学会等名 韓国・第5回延世韓国学フォーラム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 駒込武
2. 発表標題 何謂「殖民地」？從台灣的經驗與比較的觀點來思考
3. 学会等名 台灣・政治大學台灣文學研究所講演會（招待講演）（國際學會）
4. 発表年 2019年

〔圖書〕 計10件

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2019年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 338
3. 書名 教育思想・教育史	

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2019年
2. 出版社 國立臺灣大學出版中心	5. 総ページ数 -
3. 書名 「臺灣人的學校」之夢：從世界史的視角看日本的臺灣殖民統治	

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2015年
2. 出版社 國立臺灣大學出版中心	5. 総ページ数 -
3. 書名 殖民地帝國日本的文化統合	

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 生活綴方で編む戦後史 <冷戦> と <越境> の1950年代	

1. 著者名 教育史学会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 六花出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 教育史研究の最前線	

1. 著者名 日本植民地研究会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 320
3. 書名 日本植民地研究の論点	

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2018年
2. 出版社 六花出版	5. 総ページ数 370
3. 書名 教育史研究の最前線	

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 日本植民地研究の論点	

1. 著者名 駒込 武	4. 発行年 2015年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 877
3. 書名 世界史のなかの台湾植民地支配 台南長老教中学校からの視座	

1. 著者名 駒込武	4. 発行年 2015年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 818
3. 書名 世界史のなかの台湾植民地支配 台南長老教中学校からの視座	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	富山 一郎 (Tomiya Ichiro) (50192662)	同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授 (34310)	
連携研究者	小川 正人 (Ogawa Masahito) (10761629)	北海道博物館・研究部・アイヌ民族文化研究センター長 (80101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	鳥山 淳 (Toriyama Atsushi) (60444907)	琉球大学・島嶼地域科学研究所・教授 (18001)	
連携研究者	板垣 竜太 (Itagaki Ryuta) (60361549)	同志社大学・社会学部・教授 (34310)	